

〔科目名〕 教養特殊講義Ⅱ	〔単位数〕 2 単位	〔科目区分〕 教養科目
〔担当者〕 大森 史博 Fumihiro Ohmori	〔オフィス・アワー〕 時間: 講義開始時に指示する 場所: 613 研究室	〔授業の方法〕 講義
〔科目の概要〕 哲学の原義は「知を愛する」ということ、つまり事象についてのあくなき探求を意味する。そうであるならば、哲学とは、概念を形成する活動である以前に、ましてや、すでに出来上がった概念の操作や陳列である以前に、問いの生成に寄り添うことであり、その探究を表現にもたらそうとする努力であるはずだ。 この講義が焦点にするのは、哲学の探究なかで提起されてきた概念や問いであるが、同時にそうした思考のプロセスの表現である。例えば、定型詩や小説といった文学作品の文体はもとより、諸々の芸術作品のスタイル、あるいは学術研究において用いられる論述の作法さえも、各々の思考を牽引し、促しめれば規制することにもなる媒介なのである。多様な表現のあり方が、思考を触発し、媒介するという、この点に目を向けたい。 現代思想の論客たちが、さかんにロゴス中心主義を批判してきたことは記憶にあたらしい。しかし、それはどういうことだろうか。もっとも素朴には、伝統的な哲学の方法はロゴス（つまり言葉や理性）を用いることであり、哲学の営為とロゴスは切り離すことができない。人間の知の営みとロゴスを分かちことができると考えるのは、あまりに安直である。だが、ロゴスそのものの出自は、ロゴス以前の経験に求めなければならないはずなのである。 本講義の目的は、こうした表現の問題を軸として、哲学を学ぶための、あらたなアプローチの仕方を探ることである。より具体的に言えば、①伝統的なロゴスの技法である「対話」という方法を実践的に行うこと、②哲学、文芸、芸術、等々の多様な表現のスタイルに触れ、慣れ親しむこと、③哲学の問いを生み出し、思考を媒介する対象(自然のものであれ、芸術作品であれ)を捉え、その経験を言葉によって表現にもたらすこと、といった実践的な活動をおこなう。 履修者は、各授業回の小レポートの記述、プレゼンテーション原稿の準備と発表、課題レポートの提出と総括、対話や質疑応答、といった活動への参加と報告を必須とする。進め方については、授業開始時に説明する。		
〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか〕 春学期に開講の「哲学Ⅰ」は、西洋哲学の歴史を軸としたベーシックな講義であり、また、この講義と同じく秋学期に開講される「哲学Ⅱ」は、現代哲学のトピックともなる諸問題を軸として考察を深めようとする講義である。さらに本講義は、これらの授業と密接に関連しながらも、また別様の仕方で哲学への接近を試みることであり、そのあらたな魅力へと受講者を誘うこと、対話をとおして探究の思考をともにすることを企図している。 かつて現象学派の哲学者たちは、哲学を「事象そのものへ」の遡及であり、哲学するとは「世界を見ることを学びなおす」ことであると語っていた。いまいちど自らの思考において、世界を見る、世界についての知をうるという探究の経験を捉えなおし、再考をすすめることにより、この世界を生きることのエートス（世界に住まうという人間性）と存在のロゴス（いまここに存在することの意味）についての理解を深めたい。		
〔科目の到達目標(最終目標・中間目標)〕 中間目標: 哲学の「問い」の意味を理解し、関連する文献や媒介となる事象を自分なりに解釈することができる。 哲学の諸概念を駆使して、経験する事象を捉えなおし、自らの「問い」を提起して考察を深めることができる。 探究的な哲学の「対話」に積極的に参加することができる。 最終目標: 自ら提起する問いの探究や他者との対話をとおして、この世界を生きる人間についての理解を深める。		
〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕 哲学の開講科目の拡充にともない、昨年度より講義内容を大幅に変更し、新たな形式で授業をおこなっている。 内容が難しいという指摘はつねにある。事象そのものを繊細に捉えようとするならば、無理に単純化したり、簡略化したりすることは本末転倒であるから、できるだけ丁寧に要点を伝えることができるよう工夫していきたい。理解しにくい事柄や難解な点については、できるだけ噛み砕いて説明してゆくので、気になることは遠慮なく尋ねて欲しい。質疑応答や参加者相互の対話の時間を十分とることができるよう、授業の組み立てを工夫していきたい。		

〔教科書〕 使用しない。必要な資料はプリントして配布する。	
〔指定図書〕 なし。	
〔参考書〕 『対話の技法』、納富信留著、笠間書院 2020 年 『映画で考える生命環境倫理学』、吉川孝ほか編著、勁草書房、2019 年 『メルロ＝ポンティ『眼と精神』を読む』、メルロ＝ポンティ著、富松保文訳、武蔵野美術大学出版局、2015年 『マンガは哲学する』、永井均著、岩波現代文庫、2013 年 その他、授業のなかで紹介する。	
〔前提科目〕 関連する哲学の講義や演習を履修していることが望ましいが、必須の前提ではない。	
〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等) 各授業回の小レポートの記述(24%) プレゼンテーション原稿の準備と発表(36%) 課題レポートの提出と総括(28%) 対話、質疑応答、グループ活動への参加(12%) 詳細は、授業開始時に説明する。	
〔評価の基準及びスケール〕 A:80 点以上 B:80 点未満 70 点以上 C:70 点未満 60 点以上 D:60 点未満 50 点以上 F:50 点未満	
〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕 哲学は難しいと思われるかもしれない。しかし、その難しさこそ、探究の面白さにちがいない。 自ら問いをもつこと、自ら考えることを本来として、焦らず、ねばり強く、授業に参加して欲しい。 授業スケジュールや各回の進度、扱う内容は、参加者の関心や理解に応じて変更することがある。	
〔実務経歴〕 該当なし	
授業スケジュール	
第1回	テーマ(何を学ぶか):イントロダクション 内 容:授業の趣旨と進め方、学習の課題と評価についての説明、ログスについて 教科書・指定図書
第2回	テーマ(何を学ぶか):「哲学する」ということ① 内 容:探究の技法、対話、言語、メディア、表現として対話編(プラトン) 教科書・指定図書
第3回	テーマ(何を学ぶか):「哲学する」ということ② 内 容:探究の媒介としての言語、映像表現と哲学の問題圏 教科書・指定図書

第4回	テーマ(何を学ぶか):「哲学する」ということ③ 内 容:探究の媒介としての芸術作品、絵画における思考(セザンヌ) 教科書・指定図書
第5回	テーマ(何を学ぶか):「哲学する」ということ④ 内 容:探究の対象、探究の媒介、記録と追体験、プレゼンテーション原稿の準備と発表について 教科書・指定図書
第6回	テーマ(何を学ぶか):哲学と映像表現① 内 容:フィクションが与えるリアリティ、夢と現実を分かち指標(デカルト) 教科書・指定図書
第7回	テーマ(何を学ぶか):哲学と映像表現② 内 容:時間についての問いと表現、死の意味(ソクラテス) 教科書・指定図書
第8回	テーマ(何を学ぶか):哲学と映像表現③ 内 容:語りえぬものと問いかけ、表現の放棄と語る声(ドゥルーズ) 教科書・指定図書
第9回	テーマ(何を学ぶか):哲学と映像表現④ 内 容:視覚的表現と音楽的手段(メルロ＝ポンティ) 教科書・指定図書
第10回	テーマ(何を学ぶか):プレゼンテーション① 内 容:参加者による提題、および哲学対話 教科書・指定図書
第11回	テーマ(何を学ぶか):プレゼンテーション② 内 容:参加者による提題、および哲学対話 教科書・指定図書
第12回	テーマ(何を学ぶか):プレゼンテーション③ 内 容:参加者による提題、および哲学対話 教科書・指定図書
第13回	テーマ(何を学ぶか):方法と考察① 内 容:哲学の探求と哲学の計画 教科書・指定図書
第14回	テーマ(何を学ぶか):方法と考察② 内 容:哲学の表現と表現の哲学 教科書・指定図書
第15回	テーマ(何を学ぶか):総括 内 容:哲学へのあらたなアプローチについて 教科書・指定図書
試 験	